

第IV部門 都市空間特性別にみた環境要素としてのにぎわい評価に関する研究

大阪市立大学工学部 学生員 ○桂 裕典 大阪市立大学大学院工学研究科 正会員 日野 泰雄
 大阪市立大学大学院工学研究科 正会員 内田 敬 大阪市立大学大学院工学研究科 正会員 吉田 長裕

1. 研究の背景と目的

第2次堺市環境基本計画¹⁾では、“快適な環境は、都市の魅力を高め、にぎわいのあるまちの実現に結びつく”とし、都市環境の要素としてにぎわいが関係しているとしている。しかし、その因果関係や定量的評価が課題となっている。都市の環境やにぎわいに対する人々の評価は曖昧で、緑量や騒音レベルといった個別の対応では十分とは言い難い。そこで本研究では、環境・にぎわい・愛着評価とそれらの関連性、さらにそれらの構成要素を明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

空間特性の異なる場所で、環境・にぎわい・愛着の評価要因を調べ、相互関係を明らかにするため、外部空間と内部空間に分けて調査場所を選定することとした。

(1) 調査場所

外部空間としては南海電鉄堺東駅周辺を対象とし、自動車系の大和泉南線と歩行者系の大小路筋、内部空間としては線的な堺銀座商店街と比較上面的な空間として北野田駅前施設の計4箇所を選定した(表-1、図-1)。

表-1 調査場所の状況

条件	外部空間		内部空間	
	泉南線 自動車系	大小路 歩行者系	堺銀座 線的	北野田 面的
道路幅員(m)	25.6	27.8	4.8	5.2
車線数	両側4車線	両側2車線	-	-
歩道幅員(m)	7.0	17.2	4.8	5.2
車道幅員(m)	18.6	10.6	-	-
歩道の割合 (歩道/道路幅員)	27%	62%	100%	100%
休憩施設	無	有	無	有
緑	無	有	無	少
サンプル数	70	73	68	146



図-1 調査対象場所

(2) 調査内容

対象場所を通行する歩行者・自転車利用者に対して、ヒアリング調査を実施した。人々の主観的判断で空間の環境度やにぎわい度を段階評価してもらった(表-2)。

表-2 ヒアリングの内容

区分	ヒアリング項目
空間の環境	・良い～悪い(4段階評価) ・その答えの要素(複数選択可)
空間のにぎわい	・にぎわい～閑散(5段階評価)
空間の愛着	・好き～嫌い(4段階評価)
空間の雰囲気	・良い～悪い(4段階評価)
項目毎の空間評価	・整然～雑然(5段階評価) ・喧騒～静か(5段階評価) ・歩きやすさ(5段階評価) ・景観の良さ(5段階評価) ・緑の量(5段階評価) ・障害物の量(5段階評価)etc
属性	・性別、年齢、グループ人数、居住地 ・来訪頻度、手段、目的

3. 環境・にぎわい・愛着の評価

(1) 対象箇所における三者の関係

まず、外部と内部空間それぞれについて、環境とにぎわいと愛着の評価をみると、前者ではいずれも歩行者系の大小路の評価が高く、後者では面的空間である北野田の評価が高くなった(図-2)。このことから、にぎわいのある場所は環境が良く、愛着を持つ(好きになる)といった相互関連性がうかがわれる。

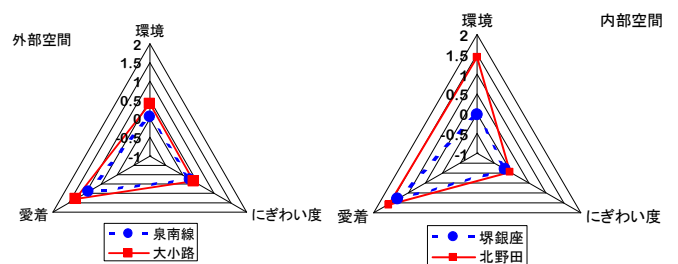


図-2 対象箇所での環境・にぎわい・愛着の評価

(2) 環境評価からみたにぎわいと愛着の評価

(1)の結果を詳細にみるため、個別箇所のヒアリング結果から、環境の善し悪しに対する評価とにぎわい、愛着の関係をみたところ、環境がよいと回答した人ほど、にぎわいがあり、調査箇所が好きと回答する傾向が認められた。図-3にはその一例として、堺銀座商店街の結果を示す。

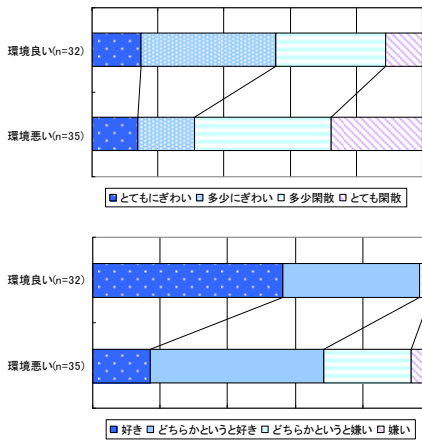


図-2 環境の良し悪しとにぎわい・愛着評価

4. 環境・にぎわい・愛着評価の影響要因

これまで示したように、環境とにぎわいと愛着の評価に関連性が認められたことから、それぞれの評価を外的基準とし、歩きやすさ等の空間に対する評価を説明変数として数量化Ⅱ類による分析を行った(図-3~5)。これらより、次のことがわかった。

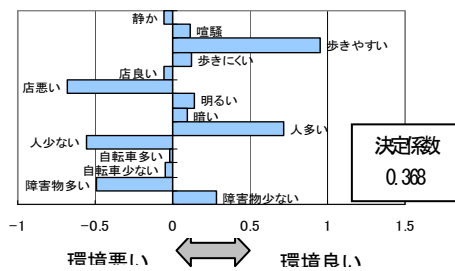


図-3 環境評価要因カテゴリースコア

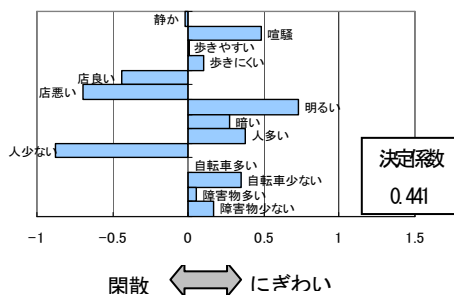


図-4 にぎわい評価要因カテゴリースコア

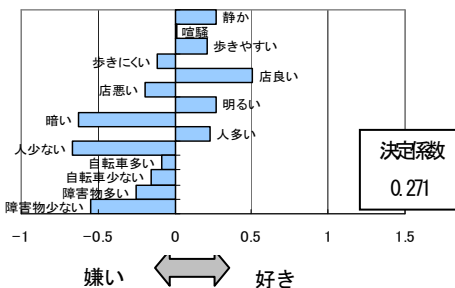


図-5 愛着要因カテゴリースコア

①環境評価には、歩きやすさ、人の多さ、障害物の少なさが影響している。

②にぎわいには、人の多さ、明るさが影響している一方で、自転車の多さはマイナス評価となっている。

③愛着評価には、人の多さや明るさ、店の良さが影響しているが、環境やにぎわい評価に比べて、各要因のカテゴリスコアは小さく、評価の曖昧さがうかがわれる。

以上のことより、3つの評価に共通する要因は「人の多さ」であることから、人は環境の良い場所に集まり、それがにぎわいを生み、結果として愛着につながるという仮説が成り立つ。また、分析の精度はそれ程高くないが、中ではにぎわい評価の決定係数が最も高いことから、にぎわいが比較的客観的に評価されやすいと言える。

5. 場所毎の比較

これまで得られたにぎわいや環境評価の主たる6要素について調査データを得点化して、空間種別毎にレーダーチャートで表してみた(図-6)。これらより、次のことがわかった。

外部空間では、大小路の方が、障害物がなく、歩きやすく、(自動車による)喧騒が少ないと評価された。

一方、内部空間については、北野田の方が、障害物がなく、歩きやすく、静かで景観がよいと評価された。また、環境やにぎわい評価に影響の大きかった人の多さには差がみられなかったが、北野田の実際の通行量は堺銀座の1/2程度であった。このことは、人の多さは通行量ではなく滞留者数で評価されていると考えられる。

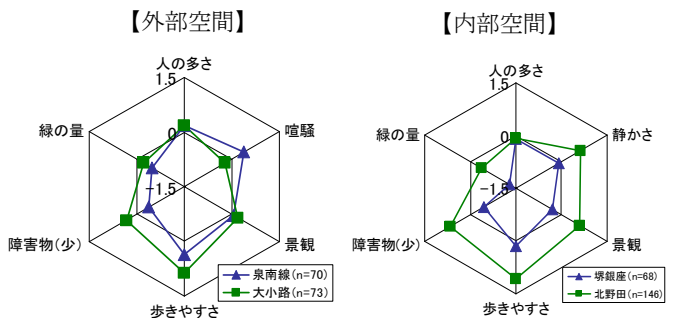


図-6 内部空間の評価得点レーダーチャート

6. まとめと課題

「環境」と「にぎわい」と「愛着」には関連があり、にぎわい評価の分析精度が高いことから、都市環境改善のためにはにぎわい創出のための施策が効果的であると言える。今後は、調査場所の種類とデータの蓄積によって、より一般的な結論を導く必要がある。

謝辞: 堺市交通計画課ならびに環境総務課の関係者の方々には、助言をいただくとともに調査にも参加いただいた。記して感謝の意を表します。

参考文献: 堺市環境局: 第2次堺市環境基本計画、2009